

「ひめゆりの塔に教えられたこと」

3年 Y.M

私は8月の中頃、家族でひめゆりの塔へ行きました。元々行く予定はなく、近くの観光名所を見に行つたついでで見に行こうとなつたのです。私はほぼ毎年沖縄に行っていたのですが、ひめゆりの塔には行った事はありませんでした。それは機会を逃していたからだと思つていましたが、今考えると避けていたのだと思います。戦争の事を語れる人が減っていく今、戦争について知らなければと思う反面、戦争の残酷な事実を正面から受けとめられる自信が、私にはなかつたのです。

初めて見たひめゆりの塔は思ったより小さなものでした。ひめゆりの塔とは沖縄上陸作戦で犠牲となつた女子学生達、ひめゆり学徒隊百三十六人の慰霊碑です。あつたのは百三十六人の遺骨の入つた石碑と再現されたガマ、あとは献花台だけでした。しんとした空気はありましたが、私は心のどこかで「なんだこんなものか」と思つてしまいました。しかし、隣接している資料館を見学し、それは間違つていたと思つました。資料館にはひめゆり学徒隊に起つた事があます所なく展示してありました。戦争色に染まっていくごく普通の明るい青春、彼女たちの目の前で荒廃していく故郷、そして死と隣合わせの日々。私なんかの想像を絶するそのすべてが、心に刺さりました。中でも一際鮮烈に記憶に残っているのは、順路の最後にあつたひめゆり学徒生と在地部隊二百二十七名の壁一面に飾られた遺影です。遺影の下には一人ひとり、どの様に最後を向えたかが事細かく書いてありました。ある人はすまし顔で、ある人は笑顔で、額の中におさまっている彼女達は、私達となんら変わらない女の子でした。劣悪な環境の中での負傷兵の看護で衰弱してしまつた彼女も、捕虜になるまいと胸に手榴弾を抱えて自決した彼女も、皆。

資料館を見学した後、もう一度慰霊碑に献花をしました。そこに眠っている学徒隊の事を思うと、言葉に言い表せない、手を合わさずにはいられない思いが湧き上がってきました。資料館を見学しただけでこれほどの感情が戦争を知らない私に生まれるのですから、1945年の夏が生存者の方々の中ではいまだに終わっていないと思つています。少し話は変わりますが、母方のひいおばあちゃんに花火を見せに熱海に連れて行つた事があります。爆音を上げ、勢い良く上がる花火を見て、ひいおばあちゃんはとても穏やかに「まるで空襲みたいだねえ」と言いました。それを聞いて私は、こんなきれいな花火さえそう感じさせてしまう戦争が心底恐ろしかつたのを覚えています。

最後に、ひめゆりの塔に行つて私が一番感じた事は、戦争はしたくないという事です。友だちと遊んで、宿題に苦しむ夏休みを送れる事がどんなに幸せな事なのか。この夏、ひめゆりの塔は平和の大切さを教えてくれました。今、憲法9条がなくなってしまうかもしれません。それを阻止するには一人でも多くの方が、今過ごしているこの日々がどんなに恵まれたものなのか知る事が大切だと思つています。この事を教えてくれたひめゆりの塔を、私はきっと来年も訪れると思つています。